

中国貨幣の歴史

1 貨幣の始まり

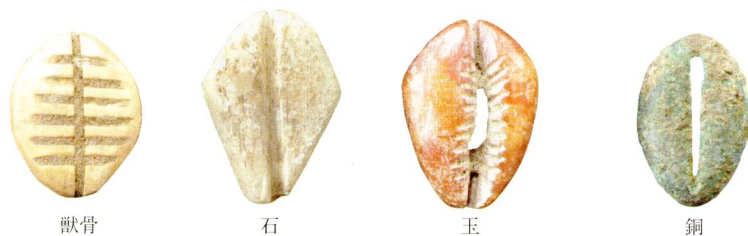


(写真は原寸)
左：腹面
右：背面

ばい か

貝貨 (たから貝)

貝貨として使用されたたから貝（子安貝とも呼ばれる）は、ヴェトナム方面の南海産が多く、貝の背面に大小の孔を開ける、あるいは背面を削り取って磨くといった何らかの加工が施されている。



獣骨

石

玉

銅

(写真は原寸)

ほうせい

倣製貝

貝貨より素材の入手が容易な淡水産の貝や獣骨、玉、銅などの素材を用いて貝貨を模倣して作ったもの。

紀元前16世紀から紀元前8世紀、殷・周^{いん しゅう}の時代の中国では、南方海産の「たから貝」が貨幣として使用された。この貨幣は貝貨^{ばい かつ}あるいは貝幣^{ばい へい}と呼ばれる。

たから貝（別名 子安貝^{こやすかい}）は、布・毛皮・穀物・農具などの実用品、亀の甲羅^{きょうら}・玉^{ぎよく}・金銀などの宝物・装飾品とともに、物品貨幣の1つである。たから貝は、その光沢や形状などの外観の特徴による宝物性・神聖性や、遠く南方からもたらされたという希少性などから、王侯貴族の間で装飾品・贈答品として珍重されていた。このため、次第に交換の媒介物として広く使用され、さらには一般的な価値表示機能をも有するようになり、殷・周時代を代表する物品貨幣となった。

「貝」という漢字は、たから貝をかたどった文字である。貨幣・経済に関する漢字、例えば貨幣の「貨」・財産の「財」・貯蓄の「貯」・消費の「費」・賃金の「賃」・貿易の「貿」をはじめとする漢字に「貝」が多く用いられているのは、たから貝が古代中国で貨幣として使用されたことに起因するものである。

たから貝は、個数や重さを単位として使用されることもあったが、通常は貝の背面に開けた孔^{あな}にひもを通していくつかの貝をまとめた「朋^{ほう}」と呼ばれる単位で使用された。この「朋」という単位については、たから貝5個を1対につないだ10個を1朋とする説など諸説あるが、「朋」という漢字はひもを通して連ねた1対のたから貝(𤚰𤚰)をかたどった象形文字である。

殷・周時代の遺跡からは、たから貝とともに、入手が容易な淡水産の貝や獣骨、玉、銅などの素材を用いて貝の形を模倣して作った「倣製貝^{ほうせいばい}」が多数発見されている。これら倣製貝には、装飾品の一種にすぎないものもあったが、一定の価値を有する貨幣としてたから貝とともに使用されたものもあった。のちの春秋・戦国時代（紀元前770年～紀元前221年）の楚の国において使用された「蟻鼻錢^{ぎびせん}」（写真）と呼ばれる銅貨は、この倣製貝の流れに連なるものである。

たから貝は、春秋・戦国時代に青銅貨幣の登場・普及という鑄造貨幣時代が到来するなかで、次第に貨幣としての地位を後退させ、再び装飾品へと戻っていった。



(写真は原寸)

ぎ び せん
蟻鼻錢

春秋・戦国時代の楚の銅貨で、たから貝の模倣品である「銅貝」の一種。
「蟻鼻錢」（また「鬼臉錢^{きけんせん}」、「鬼面錢^{きめんせん}」）という呼称は、その形状が蟻の顔にみえることによる。

[山岡直人、日本銀行金融研究所研究第3課]

【参考文献】

- 浦田繁松、『貝系統ノ貨幣』、南満教育会教科書編集部、1937年
王毓銓、『我国古代貨幣の起源和發展』、中国社会科学出版社、1990年
奥平昌洪、『東亜錢志』、岩波書店、1938年
馬飛海・汪慶正編『中国歴代貨幣大系』《先秦貨幣》上巻、上海人民出版社、1988年
山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年